博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　中川　裕

学位申請者

木村　公彦

論　文　名

The low-back merger in South-Central-Pennsylvania English：　Discussion on the diachronic spread in the 20th century

＜審査結果＞

木村公彦氏から提出された博士学位請求論文“The low-back merger in South-Central-Pennsylvania English：　Discussion on the diachronic spread in the 20th century”について、論文審査と口述による最終試験(公開審査)の結果、審査委員会は全員一致で同氏に博士(学術)の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。

最終試験は2023年7月4日(火)15時から17時までの2時間、Zoomによって遠隔開催された。審査委員会は、主任指導教員の斎藤弘子教授、指導教員の内原洋人准教授、元指導教員の益子幸江名誉教授と浦田和幸名誉教授、指導教員で主査の中川裕から構成された。

＜論文概要＞

本論文は、最近公開された1960年代の録音資料および2019年に木村氏自身が行った現地調査の資料を用いて、アメリカ英語諸方言の音韻史におけるもっとも重要な側面の一つ、後舌低母音/ɑ/-/ɔː/合流について、新しい分析手法を設計、ペンシルベニア州中南部の発音に適用して歴史再建を試みた論考である。

ペンシルベニア州中南部は、英国全土だけでなく、ドイツやスイスなど様々な言語・方言圏からの移民が歴史的にやってきた地域である。これにより、当時の英語方言が移民の流れに合わせて変化し、定着していった。また、ペンシルベニア南部では、フィラデルフィアからの移民の他にクェーカーやアーミッシュなどさまざまなコミュニティが存在し、それぞれが独自の言語・方言を発展させてきた。さらに、州を縦断するアパラチア山脈の存在により、東部と西部では異なる方言圏が形成されたという方言地理学的に複雑な背景がある。

1940年には東西を結ぶ道路網が完成し、東西の人の往来が容易になり、それが言語変化に与える影響も考慮せねばならない。

一方、後舌低母音/ɑ/-/ɔ:/の合流現象は、アメリカにおいて広く伝播した重要な音韻史的出来事である。20世紀初頭にはペンシルベニア西部で見られ始めたことが知られているが、この現象は、約100年にわたってペンシルベニア中南部へはほとんど広がらなかったことも報告されている。

なぜ、この合流現象はペンシルベニア中南部に伝播しなかったか？この英語方言史的に重要な疑問に対する説明としては、(1)「/ɔ:/の調音位置が上昇し、/ɑ/との区別が容易になった」とする母音分散説（Labov et al. 2006）に加えて、(2)「ペンシルベニア中南部のペンシルベニア・ドイツ語が基盤として機能し、両者の区別が保たれている」という言語接触説や、(3)「アパラチア山脈の地形的障壁や交通量の少なさを考慮」する地理的障壁説が提案されている。しかし、木村氏自身の最近の調査(Kimura 2018）は、若年世代で「/ɔ:/の調音位置が下降し、/ɑ/と合流しつつある」という、(1)母音分散説とは相容れない変化を示唆している。また、Anderson（2014）によると、ペンシルベニアドイツ語と英語のバイリンガル話者は1920年前後に減少しており、(2)言語接触説にも疑問がある。さらに、(3)地理的障壁説については、東西を横断する道路の交通量が増加しているという事実が明らかになっており、その妥当性は疑われる。

要するに、後舌低母音の合流がペンシルベニア中南部に伝播していない理由は不明で、また、実際には合流伝播が進行中である可能性すらある。木村氏の博士論文は、このような研究史的な空白を埋める実証的な貢献をする。結論としては、「1940年以降に生まれ育った話者の間で合流が特に女性において進んでいる」という新しい知見とそれが持つ方言地理学的な議論を、緻密な言語発掘調査的手法とフィールド音声学的手法、洗練された音響分析・聴覚実験を併用して、詳細で精度の高い資料とともに提示している。

具体的には、1960年代の古い録音資料の発掘的分析と、現在の母語話者を対象とした聴覚試験および音響分析を行い、当該母音の差が聴覚的および音響的にも減少していることを発見し、それが1940年以降に生まれた話者の間に起きていることを特定した。さらに、19世紀末には後舌低母音の合流が、ピッツバーグ周辺の西部方言の特徴である円唇性を残した音に向かって変化している傾向を確認した。これに基づいて、木村氏はこの地域における母音合流の伝播の発祥が西のピッツバーグであるという歴史的シナリオを再建している。また、女性の方が男性に比べて両母音の距離が近づいていることも判明し、Labov（2001）の大まかな指摘が正しいことに具体的な証拠を提供している。

各章の内容は以下の通りである。

第１章は言語背景の簡潔な記述がなされ、さらに、ペンシルベニア中南部の英語方言を扱う学問的な動機が述べられている。第２章はアメリカ英語の方言区分が初めて生じた植民地時代の移民の流れについて述べる。第３章は論文で用いた音韻的および音声的な表示について論じ、さらに、ペンシルベニア中南部における合流に関して、歴史的に西部から東部への拡大があまり起きていないことを中心に先行研究を総説し、博士論文が取り組む問題を明確化する。

第４章から第６章にかけては、実施した独創的な実験・分析を記述している。まず、第４章では手法に関する詳細な解説が行われており、特に使用した音声データ、オンライン聴覚実験、音声データの音響分析手法について詳細に記述している。第５章ではオンライン聴覚試験の結果を集計・分析し、その結果にみられる傾向について述べている。また、実験参加者の後舌低母音が母音空間のどちらにずれているのかが同定実験から判明したことを要約している。第６章では、第５章の聴覚試験結果の音響的な説明を試み、それとともに後舌低母音の弁別に影響を及ぼしうる音響的パラメータを検討して、F1、F2、母音時間長のすべてが後舌低母音の弁別に関与することを明らかにした。また、後舌低母音の聴覚判断に影響のある音響パラメータに着目し、分析対象を 1960 年代および 2019 年の全録音データに含まれる後舌低母音に拡大して音響的に考察している。1960 年代のデータについては、当時の共時的な地理的分布を再建した結果、1940 年データ（Wetmore 1959)と 1988 年データ(Herold 1990)の間にある空白を埋める、いわば古くて新しいデータセットを、この研究における基礎資料として確立した。

次にこの 1960 年代から 2019 年に至るまで、ペンシルベニア州中南部における後舌低母音の音色がどのような時間変化を辿ってきたのかを、2019 年のフィールド録音を用いた通時的比較で検証している。この検証においても上記の地理的分布の検証と同一の音響パラメータを比較し、若い世代ほど両母音が音響的にも近づいていること、また女性のほうが男性に比べて接近の度合いが大きいことが示された。

最後に第７章は、全体の結論を要約し、今後の研究発展のための課題を端的に設定している。

＜審査概要および評価＞

本博士論文がもつもっとも目覚ましい学術的貢献は、アメリカ方言音声学の研究およびフィールド音声学的方法論の文脈に位置付けられる。それは以下の 5 点に要約できる。

1.社会言語学的に複雑な背景を持ちながら、先行研究が少なかった地域を、古

い録音の発掘的分析やフィールド調査によって探求することで、後舌低母音の合流現象の伝播にかかわる未知の諸相を解明した点。
2.ペンシルベニア(西部、Pittsburgh)の、Scotch-Irish 系移民の発音から始まったとされる COT-CAUGHT 母音合流が全米およびカナダにまで広がる一方で、同じペンシルベニア州内の一部には広がっていないとされてきた「謎」の解明に取り組む問題設定の独創性。
3.考察の対象とする社会言語学的特徴が、移民の歴史、居住地、年齢、ジェンダーなど広範囲に渡っている視野の広さ。
4.従来よりもエラーを格段に減少させる音響分析法の設計に成功した点。
5.聴取実験の弁別検査と識別検査の結果を、刺激音の音響分析の結果とも突き合わせることで、特に、弁別検査に際して起こりうる事象を考察できた点。

これら以外に、次の点も、審査委員に高く評価された。

・所載されている実験用語彙リストが、再現実験や他方言調査への適用を可能とする。
・提案された新たな音響分析手法はアメリカ英語以外の音響分析にも応用できる。
・分析結果をグラフや図で可視化する工夫が優れている。
・文章構成も良好で明晰で全体的に理解しやすい論文となっている。

一方で、以下のような検討を要する点が指摘された。

・アメリカ英語（GA）では音素表記で長音符は使わない慣習があるので、長音符の使用や聴取実験で母音時間長にふれる際には、補足説明が期待される。
・まず、/ɑ/（LOT） と /ɔ:/（THOUGHT）の融合とその他の母音変化の関連（例えば/ɑ:/（PALM）と/ɔ:/（THOUGHT）の融合など）についても触れられるとよかった。また、/ɑ/ (LOT) と /ɔ:/（THOUGHT）の融合母音の音韻論的なふるまいについてももう少し掘り下げられるとよかった。
・母音の音色に関連する音響音声学的指標である F1、F2 についてはその取扱いに若干の問題が認められる。
・若干ながら、文章中に語法等の不備が見られた。

公開審査においては、以上のような評価すべき点と検討を要する点が指摘された。審査委員の質問のほとんどに対して、木村公彦氏は明確に回答し、現時点で回答できない問題については今後の研究課題としてどのように取り組んでいくかの説明がなされた。総合的には本論文が学位論文として学術的に極めて重要な成果を含んでおり、本学の博士学位論文の評価基準を満たしていることが認められた。

公開審査終了後、博士論文の審査および最終試験の結果から、審査委員会は全員一致で、提出された論文が本学の博士学位論文としての評価基準を十分に満たしていることを確認し、木村公彦氏に博士(学術)の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。